

中国貨幣の歴史

15 南北朝時代の貨幣②—北朝（北魏・北齊・北周）の貨幣—

「北魏」の貨幣



「たいわ太和五銖」錢



「えいあん永安五銖」錢

北魏では、華北統一後約50年が経過した後に、「太和五銖」錢、「永安五銖」錢という年号を記した五銖錢を鑄造・発行した。

「北齊」の貨幣



「じょうへい常平五銖」錢

北齊の「常平五銖」錢は、北周の錢貨と同様、それまでの錢貨に比べ精巧に作られている。錢銘の「常平」は、前漢期に政府が米価安定のために設置した倉「常平倉」に由来するとされる。

「北周」の貨幣



「ふせん布泉」錢



「ごぎょうたいふ五行大布」錢



「えいつうばんこく永通萬國」錢

北周の錢貨は、高い鑄造技術で作られ、文字や郭がくっきりと浮かび上がって見える。それまでの錢貨とは異なり、錢銘に「五銖」などの重量を示す文字が用いられていない。

北朝の貨幣

華北では、五胡十六国時代の戦乱により錢貨流通がほとんど途絶えていた。華北を統一した北魏の施策により社会経済は落ち着きを取り戻し、錢貨が市場で流通することが極めて少ないなかで新錢の鑄造が行われると軽小な錢貨の私鑄が盛んに行われ、悪錢中心ながらも徐々に錢貨が流通するようになる。「北齊」、「北周」の頃には、南朝を圧倒するまでに増大した国力を反映して、高い技術による錢貨の鑄造が行われるようになる。

南北朝時代（5～6世紀）の華北では、鮮卑族の拓跋氏による「北魏」（386～534年）が五胡諸国を平定し中国北部全域を統一（439年）する。「北魏」は、地方軍人らによる「六鎮の乱」（523～530年）を契機に華北統一後100年足らずで崩壊し、洛陽（のち鄴に移る）に都をおく「東魏」（534～550年）と長安の「西魏」（535～556年）に分裂するが、東西の政権も短命で、「東魏」は「北齊」（550～577年）、「西魏」は「北周」（557～581年）へと移っていく。この後、「北周」が「北齊」を滅ぼして華北を再統一し、「北周」の外戚であった楊堅による「隋」が中国を統一（589年）していくことになる。

こうした北朝の政権では、「均田制」や「府兵制」といった隋の中国統一や唐王朝の繁栄の基礎となる制度が整備されていく。「北魏」では、五胡十六国時代の戦乱により荒廃した土地、農民・流民を政府の支配下に再編し、税収を確保して専制支配体制を確立するため、農民を五戸で隣、五隣で里、五里で党とする村落の行政単位を定め、それぞれの長に戸籍の作成、租税徴収などを行わせる「三長制」を実施する。「均田制」は、整備した戸籍をもとに、民に均しく土地を与え、田租・調（帛・綿）の納入と徭役の義務を負わせるものである。また、「西魏」では、胡族が独占していた軍隊に漢族をも取り込んだ「府兵制」を実施する。こうした施策により、華北の社会・経済は安定を取り戻すとともに、南朝に対する北朝の政治的・軍事的優位性が高まっていくことになる。

貨幣の流通についてみると、南朝の江南地域では悪銭中心ながら銭貨が流通していたのに対し、華北では、五胡十六国時代より銭貨製造がほとんど行われず極度の銭貨不足の状況が続き、銭貨の流通はほぼ途絶え、布帛を切って貨幣として使用していたとされている。「北魏」による華北統一後もしばらく銭貨は製造されなかったが、495（太和19）年に至り「太和五銖」銭、529（永安2）年には「永安五銖」銭という年号を記した五銖銭を製造する。新銭の発行に対し、軽小な銭の私鑄が盛んに行われたとされている。

「東魏」、「西魏」では、軽小な私鑄銭を回収して北魏からの「永安五銖」銭などを製造したとされるが、鑄造時期などは明らかではない。北魏以降、南朝の貨幣も流入するようになったとされ、華北においても、「永安五銖」銭の私鑄銭など悪銭を中心に徐々に銭貨が流通するようになったものと考えられる。

「北齊」、「北周」の時代になると、精巧な銭貨が製造されるようになる。「北齊」では、553年に「常平五銖」銭（重さ4.2g）を製造し、精巧な作りのため高い信用を得たが、質の悪い銭の私鑄が横行して悪銭化が進む結果となる。また北周では、銅産地を有する長江上流の蜀方面を西魏期に支配下に置いたことを背景に、561年に「布泉」銭（4.3g前後、「五銖」銭5枚相当）、574年に「五行大布」銭（4g強、「布泉」銭10枚相当）を製造する。北周はこれらの国外持ち出しと国外の私鑄銭の持ち込みを禁止したとされる。さらに華北統一（577年）後の579年には大型の「永通萬國」銭（約6g、「五行大布」10枚相当）が製造するが、この銭銘は万国で永久に通用する銭であることを示している。これら北周の銭貨は、それまでの銭と比べかなり精巧で、その鑄造技術の高さは北周の国力増大を反映したものであり、また、次の隋の銭貨統一や唐の「開元通寶」に続く鑄造技術の基盤が整ってきたものと考えられることもできる。

[山岡直人、日本銀行金融研究所貨幣博物館]

【参考文献】

川勝義雄、『魏晋南北朝』、講談社学術文庫、2003年

山田勝芳、『貨幣の中国古代史』、朝日新聞社、2000年

山岡直人、「中国貨幣の歴史 14 南北朝時代の貨幣①—南朝の貨幣—」、『金融研究』第25巻第2号、2006年